

第25期 国立市社会教育委員の会（第9回定例会）会議要旨

令和6年1月29日（月）

[参加者]

- ・社会教育委員 矢野、栗畑、根岸、生島、中田、大森、寺澤、加藤、山口
  - ・くにたち郷土文化館担当者
- [事務局] 井田、土方、高橋

生島議長 では、これから第25期国立市社会教育委員の会第9回定例会を開会いたします。

ちょっと先に資料のことですか、開会に先立っての話ということを見せていただければと思います。

本日は、谷口委員から御欠席の連絡をいただいておりますが、定足数に達しておりますので、会議を始めたいと思います。

それでは、まず、本日の配付資料につきまして、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局でございます。本日もよろしく申し上げます。

配付資料の確認をさせていただきます。まず、次第のほうの山を御覧ください。1枚目が次第になりまして、2枚目が、資料1として、今回のヒアリング対象施設であるくにたち郷土文化館から御提供いただいた資料となります。

続きまして、議事録の山のほうを御覧ください。一番上が議事録になりまして、こちらは内容を確認いただいて、訂正がなければホームページのほうに掲載させていただければと思います。次に、公民館だより、図書室月報、いんふおめーしょんをつけさせていただいております。

配付資料は以上となります。よろしく申し上げます。

生島議長 ありがとうございます。

それでは、次第2の担当者ヒアリングに入ります。本日はくにたち郷土文化館の御担当の方においでいただきまして、ヒアリングを行いたいというふうに思います。

ここからは、司会進行を、今日は栗畑委員と加藤委員にお願いしておりますので、よろしく申し上げます。

加藤委員 それでは、これからくにたち郷土文化館の担当者ヒアリングを実施いたします。

司会進行を務めさせていただきます、国立市社会教育委員の加藤です。どうぞよろしく申し上げます。

栗畑委員 同じく栗畑です。よろしく申し上げます。

加藤委員 次に、国立市社会教育委員の皆さんからも簡単に自己紹介をお願いいたします。

では、議長から。

生島議長 社会教育委員の議長を務めております、帝京大学で社会教育を担当しております生島です。よろしく申し上げます。

矢野副議長 公民館運営審議会からの推薦で出ております矢野と申します。副議長を

しています。よろしくお願ひいたします。

中田委員 一橋大学の中田です。よろしくお願ひします。

大森委員 東京学芸大学の大森です。よろしく。

栞畑委員 青少年育成地区委員協会から出ております根岸と申します。よろしくお願ひします。

山口委員 国立市立小中学校校長会会長の国立三中校長の山口です。よろしくお願ひします。

加藤委員 続きまして、本日御出席いただいた施設担当者から簡単に自己紹介をお願ひいたします。

郷土館担当者① くにとち郷土文化館で主査をしております。私は主に予算とか設備関係を担当しているので、今回、ICTというテーマだったので参加させていただいております。よろしくお願ひします。

郷土館担当者② 同じくくにとち郷土文化館で学芸員をしています。どうぞよろしくお願ひします。

加藤委員 ありがとうございます。  
どうでしょうか。始まってしまったんですけれども。

寺澤委員 すみません、遅くなり申し訳ありません。

加藤委員 自己紹介いただいてから、そうしたら始めます。すみません。

寺澤委員 NHK学園高等学校の寺澤と申します。よろしくお願ひします。

加藤委員 すみません、ありがとうございます。

では、ヒアリングに入る前に、本日の趣旨等についてお伝えいたします。第25期の国立市社会教育委員の会では、国立市教育委員会教育長から、国立市の生涯学習、社会教育分野におけるICT活用による学習機会充実の可能性についての諮問を受け、答申すべく議論を行っております。そこで、本日、御出席いただいた施設担当者の皆様におかれましては、御自身の施設が行っている事業の中でのICTの活用状況ですとか成果、課題等について、事前にお願ひしているヒアリング項目、こちらに沿って私たち社会教育委員にお話しいただきたいと考えております。お話しいただいた後は、社会教育委員から内容についての確認や質問等をしていきたいと思っております。

なお、ヒアリング時間ですが、1時間程度を見込んでおりますが、若干オーバーする可能性もありますので御了承ください。

それでは、まず、施設担当者から、事前にお願ひしたヒアリング項目への回答を順にお願ひいたします。

郷土館担当者① それでは、説明させていただきます。

くにとち郷土文化館のICTの活用状況ということで、まず最初の設問といえますか、オンライン／ハイブリッド事業の導入過程、コロナ中及び現在の活

用状況と成果、あと、オンライン／ICT活用ならではの企画や展望、課題というお題をいただきました。まず、コロナ禍で推し進めた施策をちょっと簡単に御紹介したいと思います。

コロナは、御存じのように、できるだけ接触を避けるとかということもありまして、なかなかお客様に来てもらえないということがあって、「おうちで郷土文化館」というのを実はつくってあります。これは、当時はやりで、結構、いろんな博物館が「おうちで博物館」みたいなのをたくさん立ち上げていまして、それと同期するような形で、郷土文化館でも「おうちで郷土文化館」というものを実は立ち上げています。

内容的には、一つは郷土文化館の常設展示室があるのですが、それを中心に、3DVR、3DVRというのは、パソコンとか、あるいは、ゴーグルとかでもいいんですが、どんどん進んでいていろんな設備を見たりという、バーチャルツアーみたいなものができる仕組みで3DVRというのがあり、それを撮影してバーチャルツアーを可能にしています。今、郷土館のホームページから入っていただいて、「おうちで郷土文化館」の中で3DVRというところに行ってもらって、そこから入っていただくと、郷土館の常設展示をずらっと見るようなことができる、バーチャルで見る、探検できるというような形になっています。

それから、あと、古民家のいろんな伝統事業を当館ではやっています、ワラを使ったワラ細工とか、あと、いろんな古民家でやるイベントがたくさんあります。これは後でまた学芸員から補足してもらってもいいんですけど、そういう古民家伝統事業、これは主にくにたちの暮らしを記録する会という、結構高齢の方を中心とした会が中心に御指導いただいているという感じなんですけど、やはり高齢の方なので、なかなか子供たちと接するとか、そういうのをできるだけ避けたいというのがあります。ちょうどコロナの間はこの古民家事業はかなりやめていました。その代わり、ずっとやめていると技術の継承とかの問題もあるので、できるだけ高齢者の方たちの中だけでやりたいということもあって、それを、だから、ビデオで撮影して、それを見れるというような形にしています。今、郷土文化館のホームページに行ってくださいと、いろんなそういう古民家でやっているようないろんな事業を見ることができるといって、これは動画で見ることができると感じですね。そういうのをやっています。それから、あと、郷土館でやった講演会のものとか、そういうのも自宅ですぐ見ることができるといって進めています。

それは一番最初の部分の内容ですが、「おうちで郷土文化館」というコンテンツの充実を図ってきました。1点目ですね。

それから、2点目は、民具案内というのを、実は今も、ちょうど今日もやっていたのですが、国立市内の小学校3年生、全部で国立市内11校ありますので、その11校の小学校3年生を対象にして、昔の暮らしの体験をする授業があります。基本は生徒たちに実際に体験してもらおうということで、いろんな、大八車を押したりとか、あと、しよい籠やしよい梯子をかついだりとか、そういう民具を使ったいろんな体験をしてもらおうというのがあります。

もう一つは、やはり先ほどお話ししたくにたちの暮らしを記録する会という高齢の方たちの会といろいろ接していただいて、会の方たちに昔の国立の状況とかを話していただく、そういうのをやっています。

今日もそういうのをやっていたのですが、ただ、やはりコロナの間では、高齢の方たちが小さな子供たち、小学生とかと接するのはちょっとリスクが高いということもありまして、ここもできるだけICTの仕組みを使おうということで、Zoomを使ったテレビ会議の仕組みを使って、高齢の会員数名が、子供たちは講堂にいて、大きなディスプレイを見ながら会員の様子を見る。逆に、

会員の方は講堂の様子を見るというような形で、物理的に接することなく同じ空間を共有するような格好でリモート授業をやるということをやりました。

その様子がその次のページの写真です。左側が高齢の会員の方たちがお話ししている、これ、資料研究室という図書室みたいなのですが、そこに会の方たちはいていただいて、子供たちは広い講堂のほうにいて、ディスプレイを通してお互いにお話をするということをやりました。

それから、オンライン／ハイブリッドでの講演会の開催というののちょっとやってみました。これは、ミュージアムトークということで、「甲野勇先生の人と学問」という、そういう講演会ですね。これ、講師は北海道にいて、北海道からリモートで講演会を実施して、視聴者は自宅でも聞けますし、講堂の会場に来て聞くこともできるということで、これもやはりZoomと色々なネットの仕組みを使って行いました。この下の写真が、これは講堂で見ている様子ですね。これも実際は講師の方は北海道にいてということで、リモートでやるということをやりました。こういうことを進めてきています。

それから、あと、これはずっと課題なんですけど、資料のデジタルアーカイブ化と公開というのをやっと一部始めたという感じです。当館、収蔵資料が何万点もございしますが、その情報をデジタルのデータベースにして、できるだけ多くの人に公開したいというのがあります。ただ、まだあまりそういう公開できるような状況になっているのはそんなにないんで、現時点では甲野勇さんの資料の一部とか、あと、一部民具とかをやっていますかね。

郷土館担当者② 民具はお試しで1枚だけ。

郷土館担当者① お試しでやっている程度です。そういうレベルで、まだこれからという感じです。一応、そういうデジタルアーカイブ化と公開を進めている。これをやることによって、郷土館にあるいろんな資料とか貴重な資料をネット経由でいろんな人が見ることができる。だから、いろいろそういう研究をしている人たちがそういうのを見ることができるということが考えられます。

これもいろんな博物館で実はやっていて、特に文化庁なんか、今、今回、博物館法が変わりましたが、その中でデジタルアーカイブ化というのはかなり強く押し出しているんで、そういうのを進めているということで、まだ郷土館はちょっとしかできてないですけど、これをやり始めたという感じです。

次に、アフターコロナでも継続している、あるいは継続していきたい施策ですが、先ほど話した「おうちで郷土文化館」のコンテンツ、特に動画コンテンツ、それをもう少しもっとこれからも充実していきたいなと思っています。それから、オンライン／ハイブリッドでの講演会、これも1回やってちょっと途切れちゃっているんですが、また、そういうのをやってもいいかな、あるいは、リモート事業等もやってもいいかな、そういう仕組みを使った何かをやってもいいかなという気がしています。

それから、特に課題として持っているのが、先ほどお話ししたく私たちの暮らしを記録する会の人たちが結構もう高齢化してきています。多分、もう80代、下手すると90代ということで、そういう人たちが、今、中心になって指導しているいろいろやっていたいていいるんですけど、ただ、あまりにももうちょっと厳しくなってきたところもあるので、これをちょっと、そういう人たちのお話とかを伝承しなくてはいけないことがあって、その聞き取りとかビデオ撮影とかをもっとやっていきたいなというふうに思っています。

それから、2番目で、学習機会の提供に関わるICTの活用実態と課題ということで、事業の申込みとか情報発信、SNSの活用などという話がありましたのでちょっとだけお話しさせていただくと、今、始めているのは、一つは事

業の申込み。これ以前は電話申込みが主体だったんですが、最近はGoogle Formを使ったウェブの申込みと往復はがきの併用という形で、電話申込みはできるだけ避けるような形にしています。これは、電話申込みだとしても言った、言わないとか、あと、電話番号の取り違えとか、いろんなことが発生するので、特に今の若い人たちはそういうネットで申し込むというか、ウェブ申込みなんか普通にやるので、そういう若い世代の人たちからは非常に好評な申込みがある。それを始めています。

ただ、高齢者の方はやはりまだ電話のほうがいいという方もいらっしゃるので、ちょっとデジタル・ディバイド的な観点でどう考えていくかという課題があるという状況ですね。

それから、情報発信ですが、SNSの活用に関しては、ホームページとか旧ツイッター、XとかYouTubeとかの活用を少しずつ進めていますけど、やはりできれば本当は資料のデジタルアーカイブ化をもっと進めて公開できる、そういう情報発信をしたいのですが、その辺がまだまだちょっと課題としてはあるかなということですね。

それから、ICT機器やWi-FiなどのICT活用環境の整備状況と課題ということなんですが、基本的には必要最小限のICT機器とLAN、Wi-Fi環境は整備しています。一応、フリーWi-Fiが館内全部飛んでいますし、そういうものは整備しています。

ただ、ICT機器はちょっと性能が低いといえますか、結構、学芸員さんたちは割と高いPCの性能を要求する、例えばAdobeのグラフィック系とか、そういうのを結構駆使されるので、そういう意味では、今、郷土館で常備しているPC環境は、事務処理をするにはいいんですが、そういうAdobeとかでいろいろグラフィックを使うにはあまり適していない環境なので、その辺、ちょっと改善しなきゃいけないかなということ、次のリースとかの中では考えていきたいなと思っています。

それから、当館、サイボウズというのを導入しています。これは財団全体でやっているんですけど、サイボウズの中でkintoneというのをを使って、以前はkintoneで業務アプリをつくっていました。それは、財団の中にITを開発する人がいたんで、その人が中心にやっていたんですが、今、そういう人たちがいなくなったので、業務アプリの開発がちょっと止まっちゃっているということが、これは財団の共通課題でありますけど、課題だと思っています。

それから、先ほどお話ししたデジタルアーカイブ、だから、資料のデジタル化、これの構築のためのやっぱり人員と費用が絶対的に不足しているということで、ちょっと予算上の問題もあるのですが、そんなに多くの人を投入できないということと、結構、デジタル化ってやっぱり時間と手がかかる、それももうちょっとやり方を工夫すればできるのかもしれないですが、そういう状況だと思うんで、その辺がちょっと課題として大きくあります。

それから、最先端の話をする、例えば生成AIとかメタバースとか、あと、バーチャルリアリティの博物館とか、そういうのが、今、世の中の的には結構立ち上がってきています。そういうものの導入もちょっと検討しなきゃいけないなと思っています、マイクロソフトのCopilotとか、あるいは、AdobeのFireflyとか、そういうのを導入するかなというのは考えているんですが、なかなかこれも費用対効果、費用の問題とかがあってなかなか難しいところです。

それから、その他ということでお話しさせていただくと、コロナ対策として、学芸業務従事者に在宅勤務を導入しました。これ、コロナのとき、皆さんも結構リモート勤務とか、いろいろやられたと思うんですが、市の方針に従って在

宅勤務というのを導入して、これ、コロナ後も働き方改革として継続しているんですが、学芸業務って結構家でじっくりやることもできるので、必ずしも郷土館まで来なくてもできることが結構あるので、そういう意味で在宅勤務は継続していて、割とうまく機能しているのかなと思っています。今は、だから、半分以下です。3分の1とか、人によりますけど、そのくらい在宅勤務を使っているという感じですかね。

在宅勤務を使うようになったら、クラウド環境を整えたりとか、あとは、ちょっとセキュリティとかアプリの整備とかありましたが、基本的には、大体、館にいるのとそんなに変わらない状態で自宅のパソコンで作業していただいているということですね。

それから、これはコロナ前から始めていますが、「ポケット学芸員」というスマホアプリを使った常設展示室の音声ガイド、これを導入しています。これも、コロナの中では、結局、学芸員さんにいろいろお話を聞くとかいうのも、別に接触しないで自分で持っているスマホでが解説が聞けるということで、結構重宝したのかなというふうに思っています。これはネット環境があればどこでも聞けますので、今でも皆さんのスマホでこのアプリを導入していただければ、郷土館の常設展示のいろんな解説を聞くことができるということで、そういう意味でもいいのかなという感じです。だから、国立市の歴史の勉強を簡単にすることができます。ということで、コロナ前から少しスタートしていて、これをもうちょっと充実したいなと思っています。今、日本語バージョンぐらいで止まっているので、もうちょっと多言語化とか、そういうのが進められたらなと思っています。

私のほうからは以上です。あと、何か補足するなり。

郷土館担当者② 大丈夫です。

郷土館担当者① Q&Aの中で。

加藤委員 ありがとうございます。

ここからは委員の質疑応答の場としたいと思います。今、御担当の方からいただきました御説明について、委員から、内容の確認や追加の質問などがありましたら聞きたいと思います。どなたかいかがでしょうか。

では、お願いいたします。

大森委員 大森です。御説明ありがとうございます。

1点、御質問です。オンライン／ハイブリッドの講演会について御説明をいただいたんですけども、これは北海道、遠隔地の講師の講演ということで、これはコロナ禍でこうしたものの導入の機運が高まって実施をして、それを経て平時でも導入ということで、そういう経過でよろしいですか。

郷土館担当者① そうですね。コロナということで始めたんですけど。

郷土館担当者② 多分、1回のみですね、これ自体は。このとき、やはりどうしてもコロナ禍ということもあって、講師がいらっしゃれないということで、会場以外からも見ている方はいたんですけど、そうですね、それ以降は、講演会をして、その映像を記録して、それをホームページで流すということはしているんですが、直接、生でこれを配信するという事はしてないです。

幾つか、多分、問題があると思うんですけど、講師の資料によっては、そのときだけ、講演会のおきにお借りしますって言って、ほかのところから許可を

得て映しているものとかがあったりですとか、やっぱり長期間、映像にしてもなんですけど、長期間、ホームページとかに載っているのは（講師の方が）嫌だということもあったりするんで、特にこの生で配信というのは、あと、このときもちょっとトラブルというか、うまくいかなかったところがあったんですけど、講師のほうでやっぱり操作がちょっと分からなくなっちゃった時とか、ちょっと最後のほうでうまく会場の人とのやり取りができなくなっちゃったりとか、そういうトラブルもあって、多分、こちらの職員のほうでよく分かっているならば、こうすればできますよというふうにすぐ対処ができたと思うんですけど、その辺が、こちらのほうも不慣れなところもあって、ちょっとうまくできなかったところもあって、それ以降は生で配信ということはしていない状況です。

加藤委員 よろしいでしょうか。  
ほかはいかがでしょうか。  
お願いいたします。

矢野副議長 ウェブ申込みと往復はがきの併用を増やしているというお話なんですけれど、定員をオーバーした場合、先着順なんですか、それとも抽選ですか。

郷土館担当者① 抽選。

矢野副議長 抽選になる。その場合の抽選はどういう形でするのでしょうか。

郷土館担当者② リストにバーツと並べまして、はがきの方も。

矢野副議長 一緒に。

郷土館担当者② はい。並べて、それで、一応、ウェブ上で番号を機械的に抽出する、そういうホームページがあるので、そういうので機械的に何番、何番、何番って選んでもらって入れていくとか、そういう形で大体使用していますね。

矢野副議長 往復はがきの方も、一旦、リストに入れてということですね。

郷土館担当者② はい。1回、リストのほうに入れて抽選しているという形ですね。

矢野副議長 分かりました。

郷土館担当者② メールフォームで申込みを受け付けるようになって、今まであまり来なかった事業とか、例えば古民家事業とかの繭玉飾りとか、ちょっと一般の人が繭玉飾りって何だろうみたいな、そういう事業はあったりするんですけど、伝統行事なんですけれど、そういうのも比較的、若いお母さんたちが申込みしやすくなったのか分からないんですけど、結構申込みが増えているんですね。

あと、今も通常どおりの、申込みなしで受け付けている星空ウオッチングという事業があるんですけど、あれもコロナ禍前はすごい参加者の人数が少なかったんですけど、そんなに多くなかった、20人行くか行かないかぐらいだったんですけど、コロナ禍に1回メールフォームで、人数を制限するためにメールフォームを設けたら、本当に60人とか、それぐらい、こっちが予定している以上の申込みがあって、もしかしたらコロナ禍だから逆にそういう場所を求めて来られたのかもしれないんですけど、そういうことがあったので、結構、

メールフォームにしたことで、逆に興味を持って申し込んでくれる方が増えたかなという印象で。星空ウォッチングに関しては、今年はまた1回、前のように申込みしないで来てくださいという方法に変えたんですけど、それでも、そのときから来ている方もいるのはあるかもしれないんですが、大体今でも50人前後ぐらいの方が来られるような感じに今年はなっています。

矢野副議長 講座の場合、ウェブと往復はがきはどのぐらいの割合なんですか。

郷土館担当者② それは、でも、はがきより、ウェブ申込をしている場合は、大体ウェブ申込みのほうが圧倒的に多くて。

矢野副議長 圧倒的に多い。

郷土館担当者② はい。そうですね、どのぐらいですかね。はがきは1割とか2割行かないぐらいがはがきだと思っんですけど。

あと、多少、事業によるところがあって、昔からやっている事業で、折り紙のお教室で、干支の折り紙を作るものがあるんですけど、そういうのなんかだと、あれは今年どうだったかな。やっぱりちょっと昔から高齢の方が参加している事業だと、メールフォームからのお申込みが少なくなるということはあります。ちょっと、そうですね、干支の以外かどうか忘れちゃったんですけど。

加藤委員 ちなみに、申込方法を今のように増やしたというようなことは、当然、人が入ってくる可能性は出てくると思うんですけど、やっぱりそこに至るまでの動線をつくらないと、結局、そういうふうには増えないんじゃないかなと思っまして、そういったウェブのフォームをつくるに当たって、そういった発信の仕方というのも変えていったという感じ。

郷土館担当者② 発信の仕方は、基本的には、「オアシス」という財団広報紙にQRコードを載せて、メールフォームはこちらからみたいな形にしているんですけど、発信の方法はあまり変わってなくて、それと、あと、よく使っているのはx(旧Twitter)で発信している。

郷土館担当者① あと、旧駅舎のサイネージを使わせていただいているんで、それは結構効果が出ているかもしれないですね。

加藤委員 そちらもコロナの途中でできたという意味では、影響はあったかもしれないですね。

郷土館担当者② そうですね。何か関係はあるかもしれないですね。

加藤委員 ありがとうございます。  
ほか、いかがでしょうか。

生島議長 私から。

加藤委員 お願いします。

生島議長 ありがとうございます。  
博物館の場合って、コロナ以前からやっぱりICT活用というのがすごく推



し進められてきていたところがあるかと思うので、コロナだからというよりは、ICT活用の流れがあったところに、さらにコロナが来て、いい意味でも加速したというところもあるのではないかなというふうに思っておりました。その辺が、やっぱりちょっと公民館とかほかの施設とかの違いでもあるのかなというふうに思います。

そうしたときに、そうはいてもいろんな館でやっぱり「おうちで博物館」とかってやっぱりやられている中で、VRとかもいろんなところで、ある意味で視聴者は比較もできるし、行った気にもなれるしって、アクセスもGoogleとかでつながって、非常にしやすくなったかと思うんですけども、やっぱり博物館の面白さって、現場で生の資料を見えるということかなと。そうしたときに、ああいったVRとかそういったものが、一つは実際に来館するところの動線になっているかどうか、そういった手応えが館のほうでは受け止められたかどうかというのをまずちょっと1点目でお伺いできればというふうに思いました。

すみません、あと2つあるんですけども、もう一つは、コロナ以前からICT化の流れの中で、やっぱりデジタルアーカイブというのが非常にやっぱり推し進められていたところではあるかと思えますし、今、お話があったように、SNSの活用で多くの方に参加していただくとか、そういうのがあるかと思うんですけど、やっぱり博物館、資料の発信の仕方とか、肖像権とか、様々そういった権利とかも関わってくるかと思うんですが、デジタルアーカイブ化するとか、SNS発信とかといったときに、そのことを運用するための方針とか指針、そういうようなものがつくられているのかとか、そういったことがどういう基準というか、博物館側であるのかというのが2点目で、さらに言うならば、そうしたものをどういうふうに、特にデジタルアーカイブをただネット上に上げるだけじゃなくて、利用してもらうための工夫のような講座なのか動線というのがあるかというのが2点目です。

3つ目なんですけれども、すみません、立て続けにお伺いするんですが、前期でやはり暮らしを記録する会のお話というのを伺って、非常に魅力的であって、やはり郷土文化館の特徴であるというふうにお伺いしておりました。そのときにもやっぱり高齢化という問題を伺いながら、そこをどういうふうに、でも、やっぱり子供たちとつないでいく一つの大きな博物館の特徴だというふうに思っておったんですけど、今のお話だと、若い世代の方々の参加というか関心がフォームを使うことによって増えてきたとか、呼び込んでいくところの一つのきっかけにはなるかと思うんですが、そうしたICTを活用したり、または、違う形ででも、その次の世代を巻き込んだりしていくことへの取り込む工夫とか展開とか、そこにICTというのがあるのかどうかとか、動画配信をしていくことの手応え、若い世代への、特に子供たちだけじゃない手応えが、担い手づくりとか、次の世代への関心とかにつながっているのかとか、ちょっとそういうようなことがあればお話を伺えればというふうに思いました。

以上です。すみません。

郷土館担当者② すみません、ちょっと1番のVRに関しての効果というところは、ちょっと今のところ、どのように活用されているかがあまり私はちょっと見えなくて、ちなみにこのVR、多分、恐らく自力でやるとすごくお金がかかるものなんですけど、このとき、売り込みというか、株式会社Advalayさんという会社から、そちらも、多分、実績づくりということで。

郷土館担当者① ベンチャー的な企業が実績をつくりたいというのがあって、うまくそこと連携してやったので、あまりお金をかけずに導入はできたというのが。

郷土館担当者② 普通だったら、多分、うちの館だけだったらできないような、多分、金額になるんじゃないかなと思うんですけど、それで、今、一応、ホームページのトップの、「おうちで博物館」からも見れますし、トップのほうにもバナーが貼ってあるので、そこから見れる形にはなっているので、そこにたどり着いてくれているかどうかはちょっと、アクセスが、でも、ちょっと分かんないかなと思うんですけど、そうですね、多分、リンクした先、A d v a l a yさんのホームページの中なので、ちょっとうちのほうでどれぐらいリンクがあるかがよく分かっていないんですが、1番に関しては効果がどれぐらい出ているかというところが分からないところですね。

2番のデジタルアーカイブ、SNSの基準なんですけれど、ちょっとSNSに関してはあまり基準というところをそんなに設けてはいないところですね。今、一応、アーカイブ化しているものというのが甲野勇資料になるんですけど、これは完璧に郷土館に寄贈されたもので、考古学者の方の持っておられた資料なんです。一応、多くある資料の中から著作権的に問題ないものをとるか、そういったものはちょっと学芸員のほうで判断しながら、ちょっと載せやすいものから載せているような状況になります。

本来はこの辺も、民具とか、そういったあたりを、ちょっとすみません、質問から離れちゃうかもしれないんですけど、民具とかそういったものを載せていくと、先ほどの民具案内とか、子供向けに活用してもらうことができるのかなというところで本当は進めていきたいところなんですけれど、結構、そこに関しては、これも、今、公開しているデータの元データというのが郷土館の学芸員が管理している資料のデータベースなんです。そこには個人情報が入っていたり、表に出せない情報というのがあるので、そこを精査して、この資料は出せるか、出せないかというところをもう1点ずつ判断していくしかないかなというところなんです。

なので、結構、民具なんかは特に人の生活とすごく合体したようなものなので、その辺は慎重に、公開すべきところ、公開するに当たって、表に公開するところにだけくっつけられる解説とかもあるので、その辺を改めてこちらのほうで見る方に分かりやすく入れてアップしていかなくてはいけないというところなので、やっぱりかなり人手、人の使う時間と、そういったものが必要かなというところですね。

なので、そうですね、基準というのは、ふだん、ちょっとそのものによっても違うんで何とも言えないんですけど。

生島議長 運営指針とか、そういう規程みたいなのをつくっているということではない。

郷土館担当者② そうですね、規程みたいなところにはしていないですね。まだそこまでちょっと大きなものにはなっていないのかなという形ですね。

生島議長 分かりました。

郷土館担当者① 肖像権とか著作権とか含めて、そういう基準をつくらなきゃいけないと思われるんですけど、そこは完全にはできていないので、それにできるだけ抵触しないものを、今、取りあえず上げ始めたという状況です。ほかの博物館とかでそういうのがあれば、参考にしながらつくりたいと思いますが。

郷土館担当者② 最近、デジタル化ということ自体は、オープンにできてないもので

写真なんかもやっているんですけど、市の広報からやってきた昭和30年代くらいの写真が郷土館に入っていて、その辺は、問合せがあれば、こういう写真がありますよということで対応しているんですけど、その辺の、最近、ちょっと学芸のほうで動いていたところでは、やはり肖像権に関してどのぐらいクリアしているものなのかという判断を、あれはデジタルアーカイブ学会か何かが出している、一応、基準のチェック項目があるんですけど、それを確認して貸す、貸さないというところで判断できたらいいかなというところで、一応、そういったところのすり合わせというのは、最近、ちょっと行っていたところ

です。大体、結構古いものからデジタルアーカイブ化していっているのですが、そんなに、これは表に出せないというものはほとんど少ないんですけど、例えばプールの写真だったり、その辺はちょっと顔が分かるような写真がその中に含まれている場合にどうかなという、その辺ぐらいだと思んですけど、それ以外の写真はそんなに問題ないかなと思うので、本当はその辺も資料がまとまってくれば公開するという流れに行ければ一番いいと思っています。

すみません、ちょっと2はフワッと申して申し訳ないです。そんなような感じ

です。3番の記録する会ですね。次世代、結構、確かに案外若い方が興味持ってくれるんじゃないかという感じはしますね。会の活動はずっと次世代、どうかその後の方たちも一緒にできる場所がないかなというところで、ちょうど今年、記録する会がやっている事業のうち、わら細工教室というのがあるんですけど、それに関してはわら細工伝承サポーターというのを募集しまして、5人ぐらいの方が集まって、一応、会の方と一緒に練習したり、そもそも国立の田んぼ、わら細工というのがなぜ国立で、この郷土文化館でやっているかというお話なんかをちょっと私のほうからさせていただいたりとかして、ちょうどこの間の年末の正月飾りづくりというのからちょっと動き出したところになります。

本当にどういう人が来るか分からないなと思っていたんですけど、メールフォームで募集を行って、1組は若い御夫婦、それから、お子さん連れのお母さん、若いお母さん、それから、ちょうど定年過ぎたぐらいの女性の方と、あと、男性の方ですね。大体そのメンバーなんですけれど、そういう形で、結構、私が思っていたよりいろんな世代の方が関わってくださって、すごい皆さん、やる気があっていい方たちだったので、あとはもう生身の記録する会の皆さんとうまくいい関係をつくって、会の方からいろいろ学んでいただいたり、会の方もそのサポーターの人と仲よくして、頼っていただいて、そういう伝承活動というのが続くといいなと思ってやっています。

そちらも本当に今年の暮れに始まったばかりのところで、これからどうしていくかというところなんですけど、募集しようと思えばもしかしたら、手応えとしてはもっと集まるんじゃないかなという気はしているんですけど、ただ、いっぱい増えてしまっても、会の方たちのキャパオーバーになってしまう、逆に負担になってしまうかなというところで、伝承をするに当たってもやはり教えたりとかしなきゃいけないということ、あまり知らない人たちの人数が多くいるということというのはやっぱり会の方の負担になってしまうので、ちょうど今、5人ぐらいなんですけど、比較的、今、ちょうどいい人数かなと、スタートとしてはそこから徐々にいって、その方たちが結構コアに活動できるようになってから次のステップでいいのかなというふう

にちょっと考えているところ

加藤委員 ありがとうございます。

郷土館担当者① 補足させていただくと、デジタルアーカイブ化してやるともっといろんな人に見てもらって、そういう道筋をつけると、そういう意味で言うと、多分、これ、デジタルアーカイブは、うちは早稲田システムという会社のものを使っていろんなデータベースをつくっているんですが、そこがいろいろリンクを貼って、いろんな博物館、例えば縄文の何とかといういろんな博物館のそれが出てくるとか、そういう形で情報とかが出ているので、うちはホームページには載ってきますけど、ホームページだけだとどうしてもやっぱり限りがあるので、そういういろんな博物館のデータベースみたいなところに絡んでいくといいと思っています。

あと、文化庁もそういう似たようなデータベースをつくっているの。

郷土館担当者② ジャパンサーチというインターフェースがありまして、それも、早稲田システムも、今、私たちが使っているやつからひもづけて、最終的にはそちらからも、そっちからも検索できるようにできるものなんで、ちょっとうちではまだそこまではやってないんですが、そういうものだと、本当にもっと全然くにたち郷土文化館を知らないような人からも資料がヒットしてくるとい、そういうデータベースもあります。

生島議長 ありがとうございます。

加藤委員 ほかはいかがでしょうか。

まだ御発言いただいてない委員の方、ぜひお願いできればと思いますが。こちらから当てさせていただいてよろしいですか。中田委員、いかがでしょうか。

中田委員 質問が2つあるんですが、その前にまず感想からです。最後のページに「ポケット学芸員」という音声ガイドを運用したとあります。1年ほど前に東京国立博物館で謎解きを経験したんですが、こういうアプリが導入されているなら、単なるガイドだけではなくて、そういうイベントを例えば夏休みにやったりすると、子供たちを引っ張れるんじゃないかなと思ったりもして、ここまでもうできる段階に来ているんだなと感じました。

質問の1点目です。オンラインとかりモートの講演会事業ができるようになって、一方では可能性が広がったと思うんですけど、他方で、対面で何かを行うことの自明性が、ある意味、揺らいだとも言えると思うんですね。現在、対面で何か行うことの意義とか価値をどう考えているのかを教えてくださいというのが1点目です。

それから、3ページに②として、「今後、継続していきたい施策」とあって、その下に課題も書かれています。先ほどの話でもあったんですが、機材の購入、人件費、個々の事業や企画を実施する上でのランニングコストとか、外注する上での費用とか、費目が分かってくると思うんですけども、郷土文化館として優先順位をつけてみたときに、どういうところに予算をつけていきたいか、めり張りを考えた場合に、どこを優先したいと考えているのか、伺わせていただければと思います。これが質問の2点目です。

郷土館担当者② そうですね、対面、結構、うちの場合は、コロナ禍が終わってからは対面という方向になっているんですけど、先ほどのちょっとうまくできなかったところですけど、ミュージアムトークをリモートでやったりということ

で、多分参加できない遠方の方が参加できたりというすごい利点があって、利点としては、多分、すごく感じているところではあるんですけど、実際にはそれを毎回やっていける、ちょっとこちらのほうの技術というか、そういうものがちょっとあまりついていないということもあるということも一つあるんですけど、あとは、やはり対面でやっていくことで、どうなんですかね、リモート、画面越しというものと画面を通さないものというところで、やっぱり人によってももしかしたら受け取り方が違うかもしれないんですけど、どうしても感覚が私は違うかなと思うんですけど。

講演会の場合はちょっと難しいかなと思うんですけど、それこそ博物館の物の資料とかをVRで見るのと実物を見るのというのはやはり大きく違って、実物というのは、幾らVRで例えば360度見れたとしても、こちらから受け取れる情報というのはもう精査されたものになっているので、やっぱり実物にはかなわないと思うんですね。

この間も、上海の博物館の方が来てくださって、ちょっと交流をしたんですけど、上海のほうはすごくデジタル化が進んでいて、展示しているものも結構デジタルなものを、複製だったりとかデジタルなものというのが多いという話をされていて、ただ、郷土館とかを見ていただいたときに、やっぱり実物のものを見ることとか、民具案内みたいなきに、実際に子供たちが物を触っているですとか、あるいは、来た学校の子たちが土器を見ながら観察して絵を描いているですとか、そういうことというのはやっぱり大事ななという話をして帰ってくださったんですけど、物に関してはやっぱりそういう、資料の現物の強さというものというのはやはりデジタルのものはかなわないかなというふうに思っています。でも、デジタル化するということは物を保存することにもなると思うので、デジタルを使うことで実際の物は劣化させずに保存できるということでもあるので、うまいバランスで使っていくことが大事なのかなというふうに思います。

講演会の講師も、やっぱり私は生で聞くのとリモートで聞くのでは、やっぱり先生の雰囲気ですとかそういったところ、あるいは、会場の方との共有感とか、そういったものというの、博物館という場に来てもらうということとか、あるいは、大体、講演会とかやる時というのは、うちの場合は展示と併せてということが多くですので、やっぱりそういう展示と併せて講演のほうでさらに見ていただくという、深く学んでいただくという機会としてやっていることが多いので、やっぱりその場に来ていただくということというのは大事なかなというふうに思っています。

郷土館担当者① 私のほうから少し補足すると、まず、先ほど一番最初のイベント関係で、謎解きとかそういうのを入れるといいというお話をいただいて、非常にいい御意見だと思って、ぜひ採用させていただきたいなど。郷土館の場合は、一番子供たちに人気があるのは土器パズルという、土器を手で組み立てる、これが一番実は人気があります。

オンライン／ハイブリッドと、あと、リアルとの話ですけど、コロナでやっぱりリモートのセミナーとか、物すごく増えたんですよ。私もよくリモートのセミナーに出ますけど、やっぱり集中力とか、本当に聞きたいもの場合は、やっぱりちゃんと行って対面で聞くほうが全然やはり集中力も違うし説得力も違うというか、やっぱりそういうところがあって、どうしてもリモートのセミナーだとサッと抜けてしまうような感じがあるので、リモートと対面というのはやっぱり使い分ける必要があるのかなというふうに思っています。

あと、予算の話をしていただいたので、私、予算を管理しているので、その立場から言うと、やっぱり一番大事なものは、私は人件費がまず大事だと思っていて、

特に博物館の場合、やはり学芸員さんたちというか、そういう人が財産みたいなところがありますので、そういう意味では、学芸員の方たちが気持ちよく働いてもらえるような形の勤務体制というか、それも必要だと思っていますし、そういう意味で、先ほどちょっとお話ししたんですけど、ICTの機器も、ちょっと若干、学芸員さんたちが使いにくいような形になっているところもあるので、この辺も改善しなきゃいけない。だから、できるだけ学芸員さんたちが力を発揮できるような環境を整えるのが仕事だと思っているので、そういう意味では、人件費と、それと、あと、ICT機器とかを購入することが必要だと思っています。

あとは、もう一つだけ言わせていただくと、私は設備管理のほうもやらせていただいています。郷土文化館は設立されて今年でちょうど30年になるんですよ。そういう意味では、いろんなところで設備的な劣化が来ておりまして、高齢化が来ているので、少しいろいろ直さなきゃいけないものもあって、そういう修理費とか、あるいは、いろんな見直しをしなきゃいけないところも多々出てきているので、その辺も予算的には大事なところであると思っています。

答えになっているかどうか分からないですけど、以上です。

加藤委員 そうしたら、根岸さん、お願いします。

根岸委員 中田委員とちょっとかぶったんですが、私も一番聞きたかったのが、講演会について、コロナ禍でオンライン初めてやりました。今は対面になっていますよ。今後、それをどういうふうに積み上げていくのかなというのが、まず一つ聞きたかったことです。あと、VRについては、やっぱり実物にはかなわないと思います。だけど、VRをやることによって、展示会とか博物館に人を呼ぶためのツールとしてVRを使えればいいのかというふうにちょっと感じました。一番気になったのは最初の今後のあれですね、講演会のすみ分けみたいなものもあれば聞きたいです。

お願いします。

郷土館担当者② あまりいっぱいやっていないのもあって、ちょっとお答えしづらいんですけど、このときはやっぱり先生が東京に来られなかったというのも結構大きかったんで、講演会をやりながら、またさらにオンラインで外に発信していくというものが、さっきから何回も言っているところではあるんですけど、そちらのほうも、先生が何かトラブルがあったときに対応できるかとか、そういったところをちょっと強化していかないとなかなかちょっとできないところではあるんですけど、なので、ちょっとそのすみ分けで確認していくところまでちょっとたどり着いていけないのかなという気がしています。

根岸委員 今後、やっていこうというふうな考え自体はあるんでしょうか。

郷土館担当者② そうですね、今のところ、ちょっとその余裕がないかなというところですね。そうですね、この会場でやって、それを配信して、ここじゃないところを見れるというふうなこともできるといいんですけど、そういう内容に合ったものがあればできるんですかね。結構、そういう歴史、先生が歴史の、そんなに配信、そうですね、まだ検討をあまりしていないところというのが正直なところですね。

郷土館担当者① 一つの方向性としてはそうなんですけど、実態はコロナ明けてから対面のほうに戻ってしまったという感じにはなっていて、コロナ禍でも実は1回

だけしかオンラインはできなかったという感じですかね。だから、そういう意味では、ただ、ほかの博物館とかの動きを見ている、やはり若干また対面に戻っているというようなところがあって、だから、それがまた同じような、逆にオンラインにまた動くような流れが起きるかどうかわからないですけど、今はちょっと対面側に振れちゃったという感じですね。

根岸委員 ありがとうございます。

加藤委員 そうしたら、寺澤委員、お願いできますでしょうか。

寺澤委員 まず私の感想から言うと、いろいろなことをお聞きした中で、すごい印象に残ったのが、デジタル化というと効率を求めるというイメージしか私はなかったんですけど、さっきのデジタル化は保存することでもあるというのは、すごい、なるほど、確かにそのとおりだなと感じました。あともう一つが、文化館というとやっぱり財産は文化財なのかなと思っていたら、人が財産って、感動しました。まず、感想です。

お聞きしたいなと思ったのは、くにたちの暮らしを記録する会の方々、割と高齢というお話があったと思うんですけど、高齢になればなるほど、デジタル化に対しては何となく抵抗じゃないですけど、こんなカメラの前で話すのは... みたいなのとかがあるのかなと思ったんですけど、もうこの写真を見ても、皆さん、スッと受け入れてやってくださっているような感じがあって、これはどんなマジックを使ったらこんなふうになるのかなというのが一つ興味を持ったところです。皆さんとの信頼関係の中で、そういうのがスッと入ってきたってことでしょうか。

郷土館担当者② 一応、両方、お互いの、子供たちの顔、形は見えていて、子供たちは記録する会の顔が見えているという、一応、写真なんですけれど、ここ、2枚並んでいるのは。練習は1回しました。

郷土館担当者① 意外と高齢の方ってそんなにデジタル音痴というわけではなくて、こういう環境も受け入れられるものですよ。そんなに抵抗なくサッと入ってこられたと思いますけど。

寺澤委員 そうなんですね。なるほど。

郷土館担当者② やはり対面じゃないので、やっぱりお互いちょっと分かりづらいというのは、実際、このときやっていてあったのかなという印象ですね。すぐに自分の言っていることがちゃんと受け取られているのかとか、子供たちの表情とかが細かく見えるわけでもない、その辺がやっぱり対面とは違って、多分、やりづらかったところも、デジタルがやりづらいというか、離れていることでのやりづらさというのがあったのかなというふうに思いました。

寺澤委員 ありがとうございます。

あと、もう一ついいですか。いろんなことをやっていらっしゃるんですけども、人という意味で言うと、限られた人数の中でやっていると思います。人数的には潤沢というか、十分な人数がいて、これだけのことを回していけているのでしょうか。

郷土館担当者② 博物館の仕事、やろうと思ったら幾らでも人が必要なところで、どこまでできる、やるかという感じだと思っています。資料のそれこそデジタル化するにしても、やろうと思ったら幾らでも今までデジタル化してないものはあるので、それこそ限りなく人は欲しいという状況なんですけれど、そういうわけにもいかないの、本当にバランスを見てやっていくしかないのかなというふうに思っています。

コロナ禍にいろいろこれだけできているのは、やはり事業が、コロナ禍のためにできなかった事業とかも結構あって、逆に、だから、その部分のパワーをデジタル化ですとか、こういうちょっとオンラインでやってみようかとか、そういうところに使ったのかなというのが私のコロナ禍の活動イメージで、今、コロナ禍のときみたいに、じゃあ、動画を撮ったやつを毎回アップしてとかっていう時間がつくれるかという、ちょっとコロナ禍のときのようにはいかないのかなと思っています。

私もちょっと2年前ぐらいに、くにたちの暮らしを記録する会の活動とかを含めて、文化についていろいろやってきた方たちの展示というのをやったんですけど、そのときの展示の動画とかをつくりたいなとずっと思っているんですけど、やっぱり日々の業務の中で、なかなか今度、ちょっとそういう動画をつくる時間というのはちょっと減ってきてしまって、今、そういう動画づくりで、「おうちで博物館」に上げていく動画をつくるスピードというのは下がってきているかなという感じなんです。

寺澤委員 ありがとうございます。

加藤委員 では、続いて、山口委員、お願いします。

山口委員 どうもありがとうございました。

学校現場の立場で、ちょっと感想と質問なんですけど、ここに小学校3年生を対象にした昔の暮らしの体験事業なんていうふう書いてあって、随分お世話になったなと思うんですが、学校の状況から言うと、コロナ禍で推し進めた施策、いわゆるオンラインとかりモート、これが今はどっちかというともう、今までできなかった対面的なものというのをとにかく推し進めていく。やっぱり人と人を接していく、実物を見るって、こっちに振り子は振れているんですよ。じゃあ、コロナで推し進めたオンラインとかりモート、どうなったかという、これはいわゆる不登校児童生徒、こちらのほうの対応として非常に今、活用されているんです。

だから、対面や実物を見るにこしたことはないんですけど、なかなかそれができない子供たちというのがいまして、学校に足が向かないとか、いろんな理由があって集団での生活ができない、そういう子供たちにとってみると、このオンラインとかりモートというのは非常に有効な手段ですね。ですので、ぜひコロナという理由で推し進めたリモートやオンラインの施策というもの、これは財産にして、そんなにハイレベルなものはないので、そういう子供たちが自宅にいながら郷土文化館に行った体験ができる、これはぜひ継続をしていたきたいというのが一つ。

それから、もう一つは、このVRなんですけど、これは我々が思っている以上に子供たちはもう日常的に家でVR使ってゲームやっていますから、ビルの屋上に行かなくても部屋の中で高層ビル、綱渡りしちゃうんですよ、ドキドキしながら。そんなことできちゃうんですね。だから、例えば昔の暮らし体験の事業にVRを重ねて、タイムスリップして縄文時代に行くとか、国立市にいる、今のここが数千年前にあったらどんな状況だとか、それにしておいをつけてみる



とか、そんなことできるじゃないですか、VRって。そういうような、財源に限りもあるでしょうし、対象は子供たちだけじゃないのはよく分かっていますが、学校現場から言わせていただくと、VRを使って、今の子どもたちは文化館を見学するだけでは物足りないわけですよね。自分をバーチャルの世界に身を置いて、そこで昔を体験する、こんなことがもし国立の郷土文化館でできたら最高なんじゃないかなって。もしかすると、他市からも来るかもしれないですよね。ちょっと夢は広がるんですが、そういった構想とかは今のところあるのか、ないのかみたいなのところをちょっと聞きたいんです。

郷土館担当者② 今のところ、そうですね、VRを使ってというところまではちょっとないですけど、でも、やっぱり子供たち、特に民具案内については、郷土文化館ができる前から実は記録する会の方が学校に行きたくていたりしている事業で、やはり一番初めに国立市民の子供たち、市民だけじゃないんですけど、国立に学校がある子供たちが博物館に関わってくれる事業なので、すごく大切な事業だなというふうには郷土文化館も思っているんで、やっぱりそれこそ、ちょっとここにも書いてありましたけど、記録会する方の語りとか、そういったものは採集して行って、そういうものを、多分、今、元気にお話ししてくれている方たちって、もういつまでそういうお話をしていくか分からないので、そういったものをちょっと蓄積していく、とにかく蓄積していくということは大事かなというふうに思っています。

教科書にこうこうこうって書いてあるよりは、実際にそこに生まれて、実際に体験した人が語っていることというのはもっと耳に入ってくるかなと思うので、そういうちょっとこう、音声か映像か分からないですけど、そういったものというのをちょっと活用していくというのは、今後、できたらいいんじゃないかなというふうに、それはもう私が勝手にちょっと思っているだけなんですけど、そういうところはあります。

郷土館担当者① 課題でも書かせていただいたんですけど、先ほどお話があったのは、メタバースとかVR美術館、VR博物館って結構、世の中で出始めているんですよ。その辺は我々も取り組みたいと思っているんですけど、なかなかまだ検討が追いついてない。ただ、やりたいテーマではあります。そういう意味では、先ほどお話があったように、アバターで行っていろいろ見たりとか、そういうのも子供たちは普通にやっているし、メタバースなんか、Googleなんか使ってやれば簡単にできたりとかするので、そういう世界の子供たちにできるだけ興味を持ってもらえるような博物館にしたいというのがあります。

山口委員 ありがとうございます。

栗畑委員 どうも今日は大変有効な話をありがとうございました。

ちょっとざっくり、素人ではありますが、ものすごいこれから動画が増えると、物すごいデータ量になると思うんですよね。その辺の容量というか、単純に、今、どうやっているか分かりませんが、言える範囲で、相当、もしかして国立のいろんな施設の中で一番データ量が必要なんじゃないかなと思うんですけども、すなわちお金もかかっちゃうんですけども。実際にサーバーとかじゃなくて、やっぱり上に上げていくんですか。

郷土館担当者① それは上にも上げていきますし、サーバーにも蓄積していますけど、そんなに大したことは。

栗畑委員 ない。なら安心です。

最後に一つだけ、いろいろ楽しいことをやってくださっているんで感謝していますけども、ちなみに直近であった、さっき繭玉の話が出ていましたけど、1月8日に国立市内では各所で、メイン会場としては第三公園で、実行委員会制でやっているんですね。繭玉ってこうだよっていう台本に基づいて司会者が説明はしますけど、ずっとその状態でして、いまだに繭玉のことを餅だと思っている人もいるわけです。いや、国立市民、寂しいなと思うんですけども、だから、そういうときに郷土資料館へ行くと体験もできるよとかというアピールの機会にも、PRの機会にもなると思うんですね。だから、何か、実行委員会制ですから難しいかもしれませんが、ぜひ国立の文化を、せっかくもう何百人と集まりますから、今年はお店屋さん頼んでだんごを買ったんですけども、かつては朝のもう3時頃から3,000個とか作っていたわけですね。ですから、大きいのもあれば小さいのもあったわけですけど、ぜひそういう国立の文化を伝える、郷土資料館に来なくても、VRじゃなくてもそういう場がありますから、もっとほかにもあるような気がしますので、本当に利用していただければいい。繭玉だけじゃなくても、ほかに、郷土資料館さんが提供する場はあるんじゃないかなと、イベントにおいて、思っていますので、よろしく願いしたいなと思っています。

郷土館担当者② ありがとうございます。

加藤委員 そうしたら、ちょっとお時間はあれなんですけども、私のほうからも少しだけ伺いたいなと思います。

先ほど、例えばサイボウズのk i n t o n eを入れたときに、当時入れようとして、開発するIT担当の方がいらっしゃったけど、今、その方が不在になって開発できない状況になっているという話があったりとか、X、ツイッターですね、拝見していると、やぼわんって、あのやつを使っていて、ゆるキャラを使っていて、何となく、多分、どなたかが、特定の方が動かすというふうな形を取られているのかなという印象を持ったりとかで、それぞれ業務、属人化してそういったものを、ICTを動かしているのかどうかというのが一つ気になったところです。

ちょっとそれに付随して、例えばデジタル化などの作業というのは、もしかしたら館の外にアウトソーシングするというか、プロボノ的な形でデジタル化だけお願いしますみたいなのでやっていくと、取りあえず作業は広がるんじゃないかなという意味では、そういったことも含めた可能性などは考えられているのかなということについて伺いたいと思いました。

郷土館担当者② ツイッターに関しては、学芸員のほうで交代で、そのとき、担当している学芸員が頃合いを見て上げているような形です。

郷土館担当者① 一応、全員がやぼわんになっています。

加藤委員 理論的には、みんなでとにかくそのとき、そのとき、やれるときはやるといような形で。

郷土館担当者② そうですね。

郷土館担当者① 属人化の話で、k i n t o n eの先ほどのお話は、財団の中でそういうIT人材がいたのですが、その方がいなくなったので、今ちょっと止まっ

ちゃっている。これはまたこれから何とかしていきたいと思っていますが。

郷土館担当者② 今のところ、外部へのというのは。

郷土館担当者① 外部は、だから、もうデジタル化は結構委託してやって。

郷土館担当者② ホームページとか。

郷土館担当者① ホームページじゃなくて、デジタルアーカイブみたいな、デジタル化するのも、一部もう外部に委託とかはしていますよね。

郷土館担当者② そうですね。そういう意味では。

郷土館担当者① お金等の問題もありますけど、外部委託、使えるものは少し使わせていただいている。

郷土館担当者② 写真のデジタル化とか、音声の反訳というか文字にするとか、そういったところは毎年の予算から少しずつ、徐々に徐々にデジタル化していているところですね。

加藤委員 ありがとうございます。

ちょっとお時間をオーバーしてしまいましたが、施設担当者の方へのヒアリング、終了したいと思います。ありがとうございます。

郷土館担当者② 遅い時間まで、ありがとうございます。

生島議長 では、栗畑委員、加藤委員、今日は司会のほう、ありがとうございます。

残りの時間につきまして、本日のヒアリング内容の振り返りを行いたと思いますが、まず、司会のお二方、ヒアリングを行ってみたいかがあったかということ、栗畑委員からいかがでしょうか。

栗畑委員 2年前ですか、ヒアリングしたのとまた違うテーマなものですから、国立、小さな町で予算も少ない中、よく頑張っているんだなというふうに、やっぱり思った以上に構想はある。ただ、やりたいけどできないというのが本音なんだなということ。ですから、ICT化の活用のやはり一番の課題というのは、人材もさることながら、先ほど先生からもお話があったんですけど、特にハイレベルじゃなくても市民に伝わればいいと思いますので、そういうレベルならもっとやれたのに、やっぱり短絡的ですけど、お金、費用かな。市の財政の中でこういうことにお金をかけるのってなかなか、価値は重要だけど優先度はもしかしたら後回しなのかなと思ったりしています。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

加藤委員、お願いいたします。

加藤委員 私も近いところのお話で、ちょっと予算がなかなか厳しいとなるのかなと思いました。

そうですね、文化館というもので考えると、本来であると、特に予算をつけていくというのはちょっと、遠い将来のことを考えると確実に必要な作業が行

われているデジタルアーカイブなども重要なものだと思いますので、そういったところに、いかに人材であったりとか予算を配置していくのかというようなことというのは、恐らく課題になっているのかと。

逆に言うと、栗畑委員がおっしゃっていたとおりで、やりたいことの展望であったりとか、そこに必要なもの自体はかなり把握されているんだなというような気もしましたので、その辺りが一番気になるところかなと思いました。

生島議長 ありがとうございます。

山口委員はいかがだったでしょうか。

山口委員 そうですね、僕は前々回、前回休んでしまったんですけど、その前にもちょっと自分の感想の中で、やっぱりこのICTってやっぱり青天井なんですよね。だから、限られた予算の中で、一番この国立市として効率よく、一番市民の方のニーズに合ったICTの活用をやっぱり探っていかなきゃいけないと。だから、例えば今日のこの文化館の中でICTの活用をお願いするとしたら、全てはできないでしょうから、どこに的を絞るのかということだと思っんですね。国立郷土文化館の持っている財産という、資料とかそういったものをしっかりと保存していく、保管していくというところをまず第一優先にしていくのか。あるいは、それはもちろん大事なんだけど、集客という部分で、さっき私が言ったように、VRとか、そういったところにもちょっと目を向けて予算をつけていくのか。全部はできないでしょうから、軽重つけて文化館がデジタル化、ICTを活用することについてはちょっと考えていかなきゃいけないのかなというふうに思いました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

寺澤委員、いかがだったでしょうか。

寺澤委員 文化館とか博物館とかにとって、本当、変な言い方なんですけど、コロナ禍というのは逆に進むためのすごくいいタイミング、きっかけになったんだなと思いました。話を聞いていても、いろんなことに人を割けたとか、予算についても、そこに割けたとか、いろんな意味でコロナによって進んだところなんだなというのを改めて感じました。

その中で、今、山口委員もおっしゃっていたとおりで、デジタル化というのはすごいお金もかかる場所なんですけど、限られた予算の中でこれだけのことをやっていて、世代にしても、高齢者から、若い方々も取り込んでいろんなことをさらに進めているというのは、国立市、さすがだなと感じました。

生島議長 ありがとうございます。

根岸委員、いかがだったでしょうか。

根岸委員 ICTの活用って、最初、聞いたときに、一番はオンライン事業というのがぴんときたんですね。今まで公民館さんとか文化館のお話を聞いていると、やっぱりコロナのときはやったけど、コロナが過ぎたらもう対面になっているということで、もしかしたらICTの活用でオンライン事業というのはそんなにキラークンテンツというか、そんなに重要性はないのかなというふうにちょっと感じられました。特に文化館の場合は、そういう事業よりはVRとかデジタルアーカイブですかね、この辺にやっぱり注力すべきなんだろうなという気がしました。

生島議長 ありがとうございます。  
大森委員、お願いいたします。

大森委員 コロナ禍のICT活用って、2020、21、22、大体この3年間で中心だったと思うんですけど、それを今、今年度に入ってどうだったかというのを検証する段階にあると思うんですけど、この検証ってそんなに簡単ではないなという気がしているんですね。というのは、ICT活用というのはよきことで、ぜひ進めるべきで、コロナ禍でそれが加速されたのでそれはよかったという雰囲気が世の中にあふれているんですね。私自身も、その雰囲気から逃れて客観的に物を見るというのがかなり難しいなと思っていました。

一つ卑近な例なんですけども、私、大学の中で、学内だけじゃなくて外の方に向かって講演会を開く事業を担当していることがあって、コロナ禍のときに考えたのは、講演会事業って、内容をつくっていくということと実際やるということ、2つあるんですけども、無理してICT化するよりは、コロナ禍は対外的に開くことはできないけど、そこでふだんなかなか取れない研究の時間を取ったほうが、5年、6年というトータルで見ただけには限られた予算の有効活用だということが私はちょっと思ったので、そういう形で事業を組んだんですね。そうしたら、やっぱり何でもっとオンライン化しないんだという形でお叱りを受けまして、それは合致している面もあるので、その意見を基に事業を進めているんですけども、いまだにどうだったのかなという思いはあるんですね。

ですから、今、検証するという大事な局面にあるので、雰囲気にも妥当性はあるかもしれませんが、きちんと見るための枠組みをつくらなきゃいけないなというふうに、今日、伺っていて思いました。

生島議長 ありがとうございます。  
中田委員、いかがだったでしょうか。

中田委員 寺澤委員も言っていたんですが、「博物館は人が財産ですから」とさらっと言ったのが一番印象的でした。それから、コロナ禍に対しても、ICT化の波に対しても淡々と対応し、粛々と進めているような印象を持ちました。これまでヒアリングをしてきた施設と違うところは、博物館、図書館を含めた博物館は、やはり資料の保存と活用、とりわけ保存という機能を持っている点です。ICT化というとインターネットを想定しがちですけれども、コロナ禍以前から始まっていたデジタルアーカイブ化に、国立の郷土文化館としてどう対応していくかということのを堅実に進めていたというか、見据えていた印象がありました。

ICTの活用を考え、私たちが最終的に答申をまとめるときには、デジタルアーカイブ化みたいな、一見、ICTの活用と思えないところも、大事な機能と作業だと思いますので、そういったところを忘れないようにしたいと思いました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。  
矢野委員、お願いいたします。

矢野副議長 中田委員がおっしゃったように、博物館の特徴として資料の保存と活用というのがあり、活用の部分は見えますけれど、保存の部分は非常に地味で、

大事な作業だけ見えないというところがありますので、その中でデジタルアーカイブ化というの、先ほどの学芸員のお話ですと、コロナ禍のときはできなかった事業があるため、空いた時間があつたので進められたけど、現在はなかなか進める時間が少ないとのことでした。やはり最終的には人員の問題になりますので、そこはなかなか難しい部分があるかなというふうには思いました。

それと、もう一つ、前期のときに国立の三角駅舎ができたことによって、あそこで広報をして郷土文化館のほうに来ていただくというようなことで、一度、展示をしたというお話をされたと思います。その後のこともちょっとお聞きして、どうだったのかなというのはいちよつと考えていました。国立市民でも郷土文化館へ行ったことないという方も結構いらっしゃると思いますので。なので、国立三角駅舎も、ハイブリッドで国立三角駅舎につなぐとか、工夫をしてやっていると、また違った側面が出るのかなというふうには思いました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

私からも、今、一言ちょっと申し上げさせていただくと、今の御意見も聞きながらちょっと考えていたんですが、今回というのは、ICT活用というのはやっぱりすごく大事なキーワードだと思うんですけども、それが目的なわけではなくて、ICT活用を通じた、ICT活用によっての学習機会の拡充ということになってくるので、前提としてももちろんどうやってICT活用されているかということとともに、そこからどういうふうにやっぱり展開していくかということ、そこには様々な是非というのものもあるだろうということで、今回、4つの施設と機関というのでお伺いしてきたという意味では、様々な局面が、この間、見れたなというふうに思っております。

今、この間もお話があつたアーカイブ化というのはいちよつ私も注目していたところだったんですけども、様々なところで、今、デジタルアーカイブ化がされていて、それが今度、同活用されるかということに、次のステップにもう見越してアーカイブ化していかなければいけないだろうと。そのアーカイブ化する仕方にも、今度、関わってくると思うので。やっぱりちょっとぜひお聞きしたかったのは、どう使われるか。

今回、国立の場合は、特に民俗とか無形のもの、無形の資源、人が営みをつくっているものだったので、先ほどの話、それこそ餅の話じゃないですけど、餅というか、何でしたっけ。

栗畑委員 だんごです。繭玉。

生島議長 繭玉。繭玉っていうのも、やっぱり蚕、お蚕さんだったり、繭玉の作っていく農業だったり、民俗、暮らしという、その一連の流れがやっぱりあって、それが高齢の方々が伝えていくということは、デジタル化しちゃったらもちろん記録はされるけれども、その作法とか思いとか、やっぱりそれは本当に生身の人たちでこそ伝えられるのであって、次世代育成とか、そういうところにもつなぐためにはどうするかというところが、一つ鍵かなというふうには思いながら質問させていただいたところです。

そういう意味では、この公民館の話ともつながってきたんですけど、オンライン講座やればいっていいところだけではなくて、やっぱりその場で一緒に聞いている人たちの息づかいとか、発見とか、反応とか、そういうのも聞けるというのもこうした学び合いの面白さであり、ICT活用というだけではない部分というのはいちよつ浮かび上がってきたというところが、今回のヒアリングの中で、漏れがちだけれども、注目していかなければいけないところかなと思って伺っ

ておりました。

少しこの間、あと、大森委員おっしゃったように、枠組みというか、整理をしていく、その切り口というのでも整えていかなければいけないところかなというふうに思っております。ぜひ今までは単発で聞いてきましたけれども、今度、これを串刺し状にしていくような整理というのを、この後、皆さんと一緒にさせていただきたいというふうに思っております。そういう意味で、ここからしばらくは、これがどうだったのかというのをもんでいく作業を次のステップとしてしていきたいと思っております。

今日の振り返りはここまでとさせていただきます。この後のことを少し共有して、今日はここで会を閉じたいと思っております。まずは、いきなり、じゃあ、この後、どうやっていきたいと思いますかというふうなことを言っても、ちょっとどうしようというふうになるかとも思いますので、少し提案をさせていただきたいと思っております。まず、この間、本当に4か月間にかけてヒアリングをしてきたので、最初のほうのこととか、少し思い出すという、今、お話ししましたとおりに串刺し状にして考えていく取っかかりというのをつくりたいと思っております。これが次回になるかなと思うんですけれども、その意味で、少し材料を整理したいというふうに思います。

特に、これは前期も同様にやったんですけれども、司会を御担当いただいた方、自分、御自身の担当館がありますので、ここに対して少し、どんな話があったのか、そして、ヒアリングを通じてどんなにディスカッションがあったかというのを整理するシートというのを、振り返りシートを御作成いただいて、それで、次回、それを突き合わせて共有して改めて確認をし合うというようなことをしたいと思っております。もちろんそれぞれの施設においてICT活用といったときの中身の意味も違いますので、まず、その辺のことも、この施設はこういう特徴だったということも少し浮かび上がらせながら、そういったシートを作っていただければというふうに思っております。

今日、ちょっとすぐそのフォームというのをここで御提示していないんですけれども、あらかじめそれはもう出来上がっておりますので、この後、会議が終了後に、1週間ぐらいの間で大丈夫です。事務局のほうから、を通じて皆さんに配信させていただきますので、2月の中旬ぐらい、具体的な、1週間ぐらい前ですかね。会議の1週間か10日ぐらい前になるかと思いますが、締切りをお示しいただいて、取りまとめをして、次回に行きたいと思っております。

次回が2月28日なので、恐らく……。

事務局 事務局です。

今の調査、取りまとめの提出期限として、それを集約する期間がほしいので、2月16日ぐらいには出していただけると助かります。

生島議長 ということで、ちょっと忙しいんですけれども、お願いできればと思います。

具体的には、今回、ヒアリングでお聞きしたいことということで、3項目大きく提示して、施設の方々にもそれに基づいてお話をいただいております。オンライン/ハイブリッド事業の導入過程や、コロナ中及び現在の活用状況や成果、そして、オンライン/ICT活用ならではの展望や課題とか、2番目ですけれども、学習機会の提供に関わるICT活用の実態と課題とか、3番目はICT機器やWi-Fiなど、活用環境の整備状況や課題とか、そういうようなところでまずはお伺いしておりますので、この柱立てに基づいて、箇条書でいいと思っておりますので、箇条書でいいですのでまとめておいていただければ、そこからポイントだと思ふようなところを別項目で書き添えていただければ

分かるかなというふうに思います。そうしたフォームを作っておりますので、受け取っていただいて御記入いただければと思います。

お二方ずつ担当していただいているわけなんですけれども、分担とか、そういうのもうお任せをしますので、やり取りしていただきながら御作成いただければというふうに思っております。ぜひよろしく願いいたします。

前期の場合ですと、これが結構、基になって、諮問というか、最後の報告書になったり、報告書を作成していくためのプロセスとして、ディスカッションしていくための材料にもなったりしていきましたので、要点をまとめていただくということをお願いできればと思っております。それに基づきながら、次回、それから、次々回というふうにして少しディスカッションをしていきたいというふうに思います。

そのような形で進めていきたいと思っておりますけれども、まず、一、二回ちょっとそういうふうなことで年度末まで進めていきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

事務局 事務局です。

調査票のほうですけど、取りあえずは委員さんお一人ずつ御提出という形で一旦はお願いいたします。

生島議長 分かりました。二人取りまとめてということと時間があまりないということなので。

大森委員 いいですか。もう話し合っていて、まとめは私が担当するというところで。

生島議長 そういうことなんですね。分かりました。もしそういうふうな分担があれば、じゃあ、よろしいですか。

大森委員 よろしいですね、それは。

事務局 もちろん調整済なら。

生島議長 そういうことでなくても、なので、館でお任せするということでよろしいですかね。2人それぞれ、どうでしょう。ほか、例えば今日の。

栗畑委員 加藤さんを頼りにしたいと思います。

生島議長 そうですか。

栗畑委員 後で終わったらまた話ししようと思っております。

生島議長 そうですか。

どうでしょう。お一人ずつそれぞれから出されるというよりは、館でまとめていただいてという形でもよろしいですかね。もう公民館のほうはそういうふうな、決めてあるということなので。よろしい。

今、事務局のほうでそれぞれからというふうにおっしゃったのは、何か意図がありますか。

事務局 そうですね。会議の外でやり取りが発生してしまうかなと思っていたので、



既に調整済であればそれで大丈夫です。

生島議長 なるほど。

栞畑委員 ただ、すみません、フォームはなるべく早く一斉に全員に配信してほしいと思います。

事務局 確認出来次第、お送りします。

栞畑委員 そうすれば、もうあとはメールでやり取りするしかないと思っています。

生島議長 それぞれのヒアリング自体は皆さんで聞いていることですし、そのまとめのことということになるかと思えますので、館ごとで出していただくという。

栞畑委員 もっと、すみません、事務局には申し訳ないですけど、まさに今日の議事録はなるべく早くというのは、ちょっとやっぱり聞き逃したこともあったりするんで、議事録は早くやっぱり欲しいなという。そうすると、16日期限で、議事録がその頃じゃちょっと、申し訳ない、なるべく早くお願いしたいという。

事務局 今回の議事録、一応、2月6日頃には皆さんに原案としてはお配りできるかなと考えております。

生島議長 よろしいですか。ぜひお願いいたします。  
矢野委員、お願いします。

矢野副議長 すみません、別件なんですけど、スケジュール表が3月までしか入っていませんので、皆さん、お忙しい方ばかりですので、日程が入ってくると思います。今までみたいに、基本は最終の月曜、水曜日を隔月変わるという形なのか、または、変更があるのか、そこら辺はなるべく早めに決めていただけないかなと思います。

生島議長 分かりました。ありがとうございます。

今、日程の件が出たんですけれども、原案をやはり、次年度の原案を少しお示しするというのも近々にしたいと思います。3月までしか出してなかった理由は、やっぱり例えば大学の授業の関係とか、皆さん、それぞれの動きもあってということかとも思うんですけれども、現段階で、分かる範囲でということで結構かと思うんですが、来年度もこうしたような形で、今、最終週、第4週目の月曜日と水曜日を交互に入れ込んでいる形なんですけれども、そういったやり方でよろしいか。または、ここはやっぱり駄目だとか、難しいとか、それこそ大学の授業をお持ちの先生方だと、来年度はここに授業が入りそうだとかというようなことがあれば、ちょっと先にお出しいただいて、今日すぐじゃなくても結構です。事務局に御連絡いただいて、それを踏まえて取りまとめしていきたいと思いますので、そろそろ来年度の動きも見えてきたかとも思いますけれども、よろしく願いできればと思います。それを踏まえて御提示させていただきたいと思います。

矢野副議長 あともう1点、すみません。昨年、答申の検討の日程を決めるときに、このスケジュール表では中間評価が1月になっていたんですけれども、2月に

延ばせるのでというお話だったと思います。そうすると、中間評価は、2月に  
出されるということなんでしょうか。

生島議長 では、事務局、中間評価の件、お願いいたします。

事務局 中間評価ですが、現段階の状況としまして、各施設、ちょっと抽出している  
施設のほうにシートを作成いただいております、これから各館へのヒアリン  
グをさせていただきますので、2月の御報告はちょっと難しそうな感じになっ  
ていまして、3月にできればと考えております。

生島議長 ということになりそうです。

それから、恐らく2月、3月、4月あたりでは、研修会のことも考えていか  
ないといけないんですよね。ちょっとその辺の見通し、高橋さん、ありますで  
しょうか。

事務局 そうですね、前回、国立市がブロック幹事を行ったときのスケジュールを参  
考にさせていただくと、既に3月から内容についての検討に入っています。な  
ので、恐らく3月か4月にテーマが決まって、それに対して第2ブロックで何  
をするのかというのを4月、早くて3月には入っていくのかなというところで、  
現段階では想定はしています。

生島議長 分かりました。恐らく5月の総会ぐらいには、多分、皆さんにお伝えする  
ぐらいな感じなんですかね。

事務局 皆さんというのは。

生島議長 5月、6月ぐらいに総会みたいなのがありましたよね。

事務局 恐らく7月の理事会のほうで報告するかたちだと思います。

生島議長 その5月前、入る前ぐらいまでにはある程度決めていくというようなこと  
になりそうということですよ。

なので、ちょっとそういうことも入ってきますから、少しちょっとここから  
断続的になるかと思うんですけれども、だからこそ、次回のときには、この間、  
どういうヒアリングがあったかというのをきちんと取りまとめておくという  
作業にさせていただきたいと思っております。

御担当がなかった方々も、ぜひまた自分のところ以外のところもどうだった  
のか、ちょっと改めて御確認いただいております。

よろしいでしょうか。

今後の進め方のことにつきまして、ほかに何か御意見や確認しておきたいこ  
とがおります方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいですか。

では、次第2につきましてはこのあたりにしたいと思っております。

続きまして、次第3の事務局からの連絡ということで、事務局からお願いいた  
します。

事務局 事務局です。

次の開催日程と場所について御案内いたします。次回は、2月28日の水  
曜日午後7時からです。場所は、こちらの会場ではなく、第4会議室で開催と  
なります。

以上です。

生島議長 あっち。小さいほうの。ということのようです。

ありがとうございます。

その他、御質問や御発言、何かありますでしょうか。よろしいですか。

なければ、本日予定していた案件は全て終わりになります。次回は2月28日水曜日の午後7時から第4会議室、あちらの手前の会議室だということです、開催いたします。

これをもちまして、本日の会議を終了いたします。どうもお疲れさまでございました。

— 了 —